

# 總社市埋藏文化財調查年報 1

(平成 2 年度)

1991年11月

總社市教育委員會

# 序

わたしたちのまち総社市は、古代吉備の枢要の地として広く知られているところですが、こうしたことをふまえ都市将来像を“古代と21世紀をむすぶ風格ある文化創造都市”とし、その推進をはかっているところであります。

しかし近年は、岡山空港の開港、山陽自動車道の一部開通、さらには中国横断自動車道や、国道180号線バイパス計画の促進など、交通網の整備が着々と進められている現況にあります。

このため開発事業も公共、民間とも活発に行われ、文化財保護との調和に苦慮いたしております。

こうした状況のもと、埋蔵文化財調査はほとんど一年中継続して行われており、その成果は現地説明会や報道をとおして行っておりますが、報告書の刊行までにはなかなか到らないのが現状であります。

ここに新たに刊行いたしましたこの年報は、年間の事業概要を報告するとともに、その成果を少しでも早く多くの方々に公開することを主目的としたものです。

おわりに、埋蔵文化財事業の推進にあたり、御指導、御協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成3年11月

総社市教育委員会

教育長 浅 沼 力

## 例 言

1. 本書は総社市教育委員会が、平成元年度から平成2年度に行った埋蔵文化財保護行政の概要及びそれ以前に行った発掘調査報告の一部をまとめたものである。
2. 発掘調査は、文化係職員村上幸雄、谷山雅彦、高田明人、武田恭彰、前角和夫、高橋進一が担当した。
3. 出土遺物の整理は社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本書の執筆は各担当者が行い、文末に賞を記した。編集は武田が行った。
5. 遺物整理、年報作成にあたっては、西平登代子（社会教育課服部収蔵庫）の協力を得た。
6. 本書の高度値は海抜高であり、遺構実測図の方位は磁北である。
7. 第1・2図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図を複製したものであり、その他は、総社市発行のものを複製したものである。
8. 本書に関係する実測図・写真・遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

# 目 次

## 序 文 例 言

### I 立会調査概要

立会確認調査表 .....	1
---------------	---

### II 発掘調査概要

(仮称)岡山県立大学進入路・排水路工事に伴う調査概要 .....	5
鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概要 .....	9
平成2年度赤浜地区は場整備に伴う発掘調査概要(鶴亀遺跡) .....	15
テクノパーク総社建設に伴う発掘調査概要 .....	17
清水角遺跡発掘調査概要 .....	19

### III 発掘調査報告

門田・小寺土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査及び立会調査 .....	21
新岡山空港整備事業無線施設建設に伴う埋蔵文化財確認調査 .....	23
勤労者総合福祉センター建設に伴う確認調査 .....	25
伊与部山テレビ中継塔建設地の確認調査 .....	29
トーザイコーポレーション女子寄宿舎新築工事に伴う調査 .....	33

## 図 目 次

第1図 確認・立会調査位置図1 (S=1/50,000) .....	3	第12図 確認調査出土遺物(1/4) .....	22
第2図 確認・立会調査位置図2 (S=1/50,000) .....	4	第13図 確認調査地位位置図(1/5,000) .....	23
第3図 発掘調査位置図(S=1/5,000) .....	5	第14図 トレンチ配置図(1/2,000) .....	24
第4図 出土遺物(S=1/3, 1/1.5, 1/4) .....	8	第15図 出土遺物(1/4) .....	24
第5図 遺構配置図(S=1/10,000) .....	10	第16図 確認調査地位位置図(1/5,000) .....	25
第6図 林崎遺跡谷部出土遺物(1/6) .....	11	第17図 トレンチ配置図(1/1,500) .....	26
第7図 くもんめふ1号窯出土遺物(1/6) .....	12	第18図 出土遺物(1/4) .....	27
第8図 くもんめふ2号窯出土遺物(1/6) .....	12	第19図 出土遺物(1/4, 1/6) .....	28
第9図 清水角遺跡出土遺物(1/4) .....	20	第20図 確認調査地位位置図(1/5,000) .....	29
第10図 門田・小寺地区確認調査 トレンチ配置図(1/5,000) .....	21	第21図 遺構配置図(1/400) .....	30
第11図 立会調査平面図(1/3,000) .....	22	第22図 出土遺物1)(1/4) .....	30
		第23図 出土遺物2)(1/6) .....	31
		第24図 立会調査地位位置図(1/5,000) .....	33
		第25図 出土遺物(1/4) .....	34

## 平成2年度 文化財行政の概要

総社市の文化財行政は、社会教育課文化係で担当している。係員は8名で、埋蔵文化財担当職員6名、事務職員2名である。埋蔵文化財、文化財保護、文化・芸術部門とそれらに伴う一般事務を行っている。平成2年度は大型事業が多く、係としても画期的な一年であった。以下にその概要を記すことにした。

### 〔埋蔵文化財部門〕

本市は自然条件に恵まれ、岡山・倉敷両市の後背地としてベッドタウン化が進み、また内陸軽工業都市として発展してきた。近年は高速道路をはじめとする道路網の整備、県立大学の建設決定など社会条件の整備が進み、それらに触発された各種の開発事業が目白押しの状態である。

発掘調査を要す事業としては、ゴルフ場建設・道路・工場団地造成・ほ場整備などがあり、その内容については本文を参照されたい。また発掘調査にはいたらないが、遺跡のひろがりを見る上からも必要と思われる立会調査を要すものもあり、その概要を平成元年度を含め一覧表として掲げた。なお平成元年度以前に小規模な発掘調査を実施した遺跡も収録した。

調査体制は1名が調整に当たり、5名で対応した。

### 〔文化財保護部門〕

国指定史跡の、古代山城鬼ノ城の用地買収を平成元・2年度にわたって行った。この結果、全指定地約112haの公有化が完了し、3年度から整備に着手する予定である。白鳳期創建の県指定史跡栢寺庵寺跡では外擁壁、排水路の整備が行われ、3年度は塔基壇を中心とした整備を行う予定である。

国指定の備中国分寺五重塔は、県下唯一の五重塔として、また吉備路のシンボルとして親しまれてきたが、平成2年度から3カ年の予定で半解体修理が始まった。県指定の秦原庵寺跡は、数少ない飛鳥期創建の古代寺院跡だが、進入路がなく見学等の際不便をかかっていたので、駐車場を兼ねた進入路を整備した。このほか作山古墳・江崎古墳の下刈り清掃、作山古墳の遊歩道を新設した。11月7日～9日には、全国史跡整備市町村協議会の第25回大会が総社市で開催され、全国から400余名の参加があり盛況を呈した。

## 立会確認調査一覧

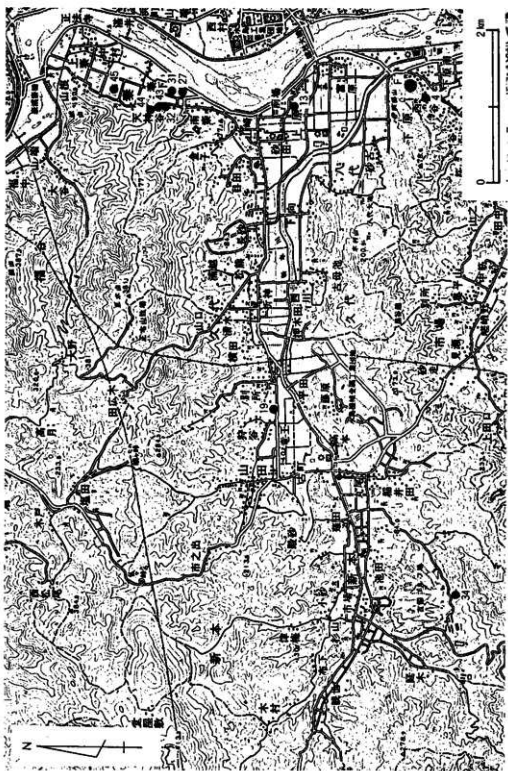
(平成元年度)

番号	所在地	調査原因及び工事内容	区別	調査期間	備考
1	金井戸533	農業用排水路改修(公共)	立会	元. 5.16	遺構・遺物なし
2	福井797-1	農地転用	立会	5.22	瓦を採集。鎌倉?
3	小寺245-1	農地転用	立会	5.22	須恵器・陶器を採集
4	下原701	墓地造成	立会	6. 8	弥生土器が散布
5	窪木564	土砂採取	確認	6. 8	弥生土器片・埴輪片採集
6	真壁661-1外	勤労者福祉センター建設	確認	6.26・7.10	弥生土器・須恵器等出土 別報告参照
7	総社1009	店舗建築	確認	6.28	中近世の水田 遺物なし
8	小寺1281-1外	公民館建設	確認	8.10	遺構・遺物なし
9	三輪926	常盤小学校校舎改築	確認	8.29	遺構・遺物なし
10	西阿曾2071	阿曾小学校校舎改築	確認	8.29	遺構・遺物なし
11	小寺891	運動場整備	立会	8.27	丘陵頂部に石式棺2(保存)
12	赤浜1173外	水場整備事業関連	確認	10.19・20	山城跡・平成元年12月～平成2年2月発掘調査実施
13	上原488外	市道改良	立会	11. 6	土師質土器採集
14	真壁316-2	宅地造成	立会	11.15	“
15	真壁312外	都市計画道路整備	立会	11.18	遺構・遺物なし
16	南壽手726	市道改良	立会	11.22	土器片採集
17	久米1590	農道水路改良(公共)	立会	12. 1	遺構・遺物なし
18	小寺26	下水マンホール埋設	立会	12. 4	包含層を検出 遺物なし
19	久代2667-2外	市道改良	立会	2. 1. 5	遺構・遺物なし
20	真壁30	下水道工事に伴う掘削	立会	1. 9	弥生土器ほか採集
21	中原8-2、17-5	下水道ポンプ場新設	確認	1.22	遺構・遺物なし
22	下林1891	市道改良	立会	1.30	弥生土器・須恵器採集
23	三須1992	農道水路改良(公共)	立会	2.16	作山古墳西側 遺構・遺物なし
24	穴栗4-2	消防無線中継局整備	確認	2.21	遺構・遺物なし
25	赤浜436外	工業団地建設	確認	2.21	水田部では、古墳から流れた埴輪を除いて遺物なし。別報告参照
26	駅前1-10-1	総社西中学校屋内運動場改築	確認	2.22	遺構・遺物なし
27	兼2336-4外	農業集落排水事業	立会	3. 5	一部に包含層があり、遺跡が予想される部分がある
28	門田769外	下水管埋設	立会	3. 7	包含層があり断面に土器片が露出
29	長良789-1	市道改良	立会	3. 9	掘削面に包含層が露出 弥生中～後期
30	三須1992	農道水路改良(公共)	立会	3.13	作山古墳前方部西側 遺構・遺物なし
31	兼1954-1外	農業集落排水事業	確認	3.23	一部に包含層が認められる 弥生土器が出土
32	兼1960-2	農業集落排水事業	立会	3.27	遺構・遺物なし

## 立会確認調査一覧

(平成2年度)

番号	所在地	調査原因及び工事内容	区別	調査期間	備 考
33	金井戸138-2	双用移転	確認	2. 4.12	遺構・遺物なし
34	新本2800-1	ゴルフ場クラブハウス移転	立会	5. 2	遺構・遺物なし
35	上林596-1	個人住宅建設	立会	5.22	遺構・遺物なし
36	井手1076-1	店舗建設	立会	5. 23・24	土器片を採集
37	上林1696	農業倉庫建設	立会	5.24	遺構・遺物なし
38	溝口618-1	集合住宅建設	立会	6. 21・28	遺物少量
39	中央1-8-2	会社宿舍建設	確認	7.12	住居址等検出 古墳時代 別報告参照
40	門田300-1	信用金庫支店建設	立会	7.16	掘削は遺構面まで達しない
41	中央1-8-2	会社宿舍建設	立会	9. 3	住居跡及び溝検出 古墳時代 39と同一地点
42	真壁2117	集合住宅建設	立会	10. 1	包含層中に奈良平安時代の遺物
43	森2232-1	進入路建設	立会	11.26	砂層 遺構・遺物なし
44	森2264-3	排水管渠埋設	立会	12. 6・7	包含層を検出 弥生時代?
45	森2264-4	排水マンホール埋設	立会	12.17	包含層を検出 遺物なし
46	井手1044-4外	ホームセンター建設	確認	12.17	微高地上であるが遺構・遺物なし
47	上林589-1	個人住宅建設	立会	12.21	埴輪片を採集
48	金井戸534	農道改良	立会	3. 1.10	掘削は遺構面まで達しない
49	福井新田	市道改良	立会	2. 5	遺構・遺物なし
50	溝口617外	下水管渠埋設	確認	2. 6	包含層を検出 遺物なし
51	真壁1274-1	集合住宅建設	立会	2.15	遺構・遺物なし 礎石
52	赤浜366-3外	工場建設	確認	2.25	古墳(新規)1基発見 現状保存
53	溝口596-2外	下水管渠埋設	立会	3. 5	包含層を検出 遺物なし
54	溝口587	公園建設	確認	3.18・19	溝・土壌等検出 中世
55	総社826-3	下水ポンプ場建設	確認	3.19	遺構・遺物なし



第1圖 確図・立会調査位置圖1 (S = 1/50,000)





第2図 確認・立会調査位置図2 (S = 1/50,000)

## (仮称) 岡山県立大学進入路・排水路工事に伴う調査概要

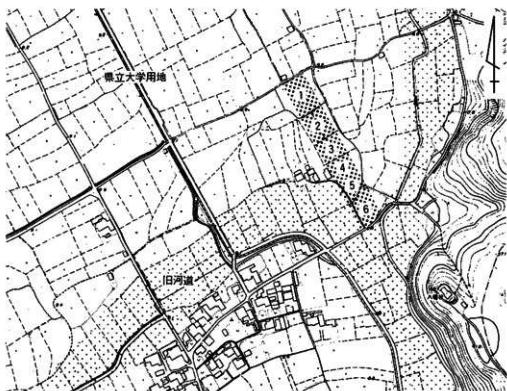
遺跡名	窪木・宮後遺跡
所在地	総社市窪木(第2図B)
調査期間	1990年4月16日～1991年8月31日
調査面積	約6,000㎡
調査概要	

平成元年11月に(仮称)岡山県立大学が市内窪木地区に内定し、建設区域が平成2年1月に正式決定された。

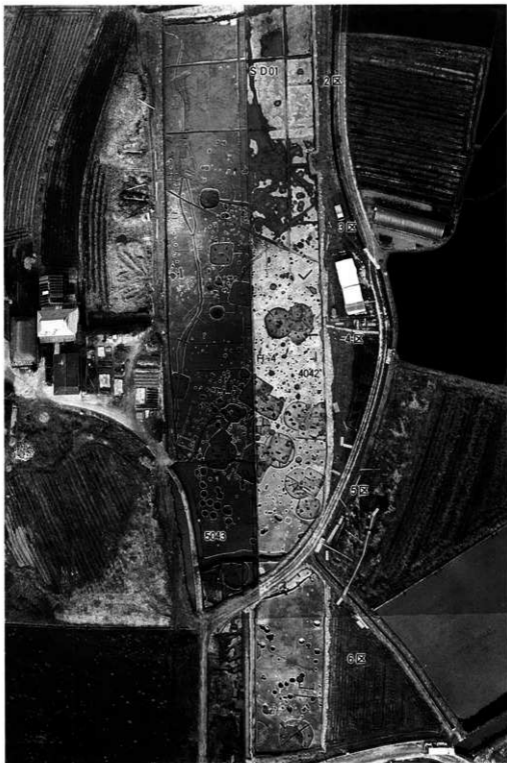
建設予定地は、市内東部寄りで縄文早期の押型文土器が出土した長良山の西一帯であり、地形は複雑に旧河道が入り組んだ状況がうかがわれた。

大学予定地のほとんどは水田であり、造成工事に伴う土砂の搬入道の確保が急務であった。

確認調査の結果、進入路650mのうち北約1/3が微高地と考えられ、住居址などの遺構が検出された。残り部分は、長良山の西山裾を流れる山陰川と窪木地内を南西から北東に向けて流れ



第3図 発掘調査位置図 (S=1/5,000)



調査地区全景（2～6区）



溝 (5043) ・住居址

た旧河道が合流し、南流する旧河道の中と考えられる。

調査区は南北に長いので、現状の水路・畦で区を設定し、北から1～6区までとした。

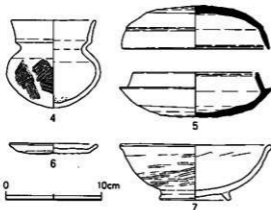
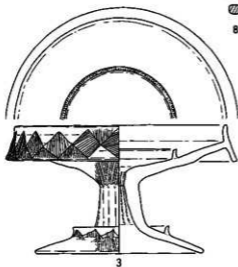
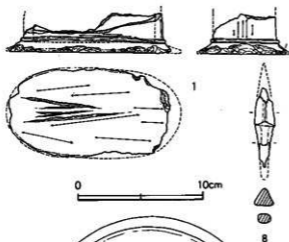
遺構の時期は、弥生時代中期から中世までであった。

遺跡の周辺を含めて概観すると、調査地の東部は全体に高く山陰川に向かって徐々に低くなる。また、調査地西部も徐々に西に高くなり、調査地は周辺に比べると低地といえた。

全体でみると1区は遺構が希薄であるが、3～5区では特に遺構が集中した。また包含層が2層認められたため、全体を上層と下層とに分けて調査を行った。

弥生時代では中期の土壌からガラス滓が出土した。市内では県立大学用地内遺跡・窪木菜師遺跡などからも出土した。また、小柱穴から青銅製の三角鏃(8)が出土した。これは従来知られていた三角鏃と形が異なるようで国内でつくられた可能性も考えられている。また、硬玉製勾玉の未製品も別の柱穴から出土している。住居址は29軒検出した。弥生時代中期から古墳時代前半までの時期のものである。

古墳時代では住居址の埋土から石製合子が出土している。また、6世紀後半になると、住居址は西端部分で1軒検出したのみで、溝が調査区内を横断していた。この内1・2区に股がって弧状に廻る溝があり、溝内から坏身・蓋が出土し内部に石製白玉が認められた。



第4図 出土遺物

中世では溝・掘立建物・井戸が3区から南で検出された。

中世以降では、調査地の南を斜めに旧河道が入っていた。

1は石製合子の身の破片であり、H-4の覆土から出土した。長楕円形の平面形をもち、石材は暗緑灰色を呈するいわゆるロウ石である。口縁端部は全面欠損しており、底部外面には擦痕状の傷が認められる。2は研磨工程の勾玉未製品であり、住居址を切る柱穴から単独で出土した。石材は純白地に鮮緑色がまだらに混じる良質の硬玉である。全面にシャープな研磨が施されており、背部には擦り切り痕跡と考えられる細い溝状の凹部が残っている。穿孔はなされていないが、頭部に錐のあたりをつけたと考えられる浅い窪みが認められる。3は溝5043から出土した飾り高環である。4の小型壺は石製合子と同じく、H-4の覆土から出土し

ている。5はSD01から一組になって出土した須恵器蓋坏である。坏内部には滑石製の白玉12個が入っていた。6はヘラ切りの土師器小皿である。7は土師器碗である。6、7ともに井戸4042から出土している。

(谷山・高橋)

## 鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報

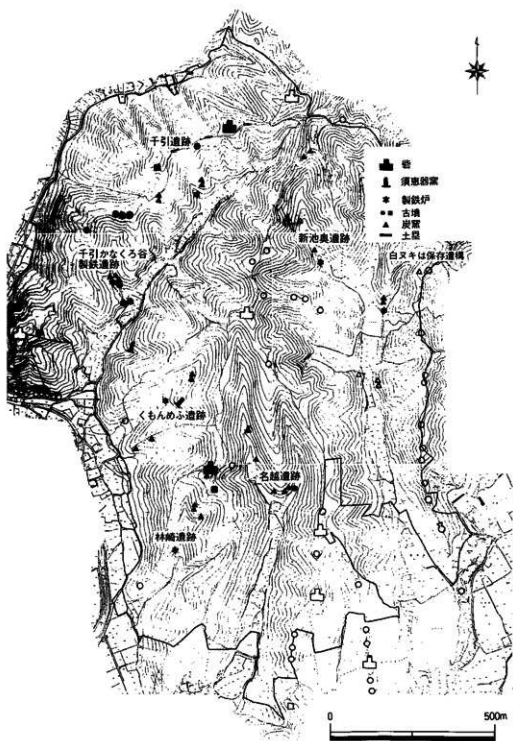
遺跡名	千引遺跡群他
所在地	総社市奥坂（第2図A）
調査期間	1989年4月1日～1991年8月31日
調査面積	約50,000㎡
調査概要	

今回の調査は総社市奥坂の丘陵約170haに御岡山リゾートがゴルフ場を造成することに伴い実施したものである。分布調査後、用地の東半分には所在する尾根については設計変更によって大部分を現状保存とした。遺跡は小字名により5地区に大別でき、以下その概略を述べる。

【千引遺跡】 遺跡は開発地内の最も奥から南に派生する標高120m～160mの尾根上に所在する。古墳はすべて横穴式石室で時期としては6世紀後半から7世紀末までである。調査対象としたのは10基で谷部の3基以外はすべて尾根の頂部付近に位置している。またすべての古墳から鉄滓が出土している。これらの古墳の中で7号墳は石室内に木炭床を有し須恵器の円面硯・丹塗りの土師器碗などが出土し、方墳ということと相まって注目される。集落跡としては尾根上に15軒の住居跡と25カ所の段状遺構が検出された。いずれも弥生時代中期で、ほとんどが焼失住居である。また時期不明の2×3間1棟と2×4間2棟の総柱建物も検出されている。若は用地内に7ヶ所が確認されたが、そのうち2ヶ所を調査対象とした。千引若は標高156mの尾根の頂部にある。不整形に低い土塁が廻り、土塁上に南面を除き2～1m間隔で柱穴が検出された。内部には2×2間の建物、1×1間の櫓状構築物、柵列などが検出された。土塁は千引丘陵内で4ヶ所が確認できた。いずれも尾根の小鞍部に位置し、長さ20～35mで版築でかなり丁寧に積み上げている。これらの土塁は若と直接、接続はせず時期も不明である。

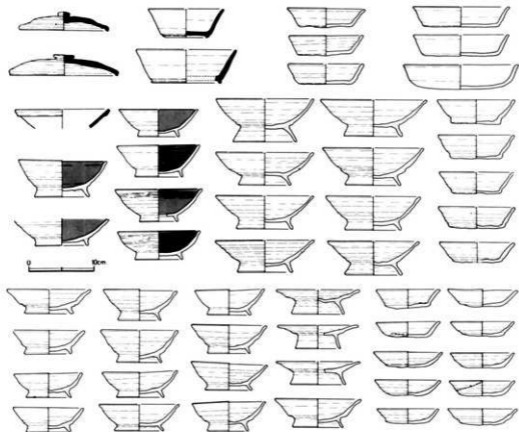
製鉄遺跡としては南に派生する小尾根に横口付の炭窯4基と製鉄炉4基が検出された。炭窯は長さ10m前後のもので2基が1組でかたまっている。炉は急斜面に小さな作業場を造成し底面に小円礫を敷いた50cm前後の方形の下部構造である。時期としては7世紀が考えられる。

【千引かなくろ谷製鉄遺跡】 遺跡は千引尾根の先端付近から東に派生する小尾根の南斜面に谷川をはさんで所在する。谷の東側に製鉄炉1基、横口付の炭窯2基、西側に製鉄炉3基、炭窯1基が検出された。炭窯は全長10m前後で、東側の2基は下方の窯の廃棄後上方に新たに構築されている。東側の製鉄炉（1号炉）は炭窯の下方に斜面を削平して作業場を造成している。炉の下部構造にあたる土坑は120cm×140cmの隅丸方形で、深さ35cmを呈し長軸側の壁面には角礫を積んでいる。底面には約10cmの炭層が確認された。炉の短軸側の南方向にのみ浅い排



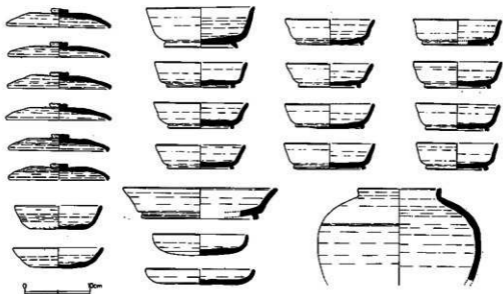
第5図 遺構配置図 (S = 1/10,000)

沖溝を有し、排滓、炉壁、焼土が下方に大量に広がっている。西側の3基の製鉄炉は奥から2・3・4号炉と呼称している。作業場は谷川に接する部分は円礫を積み斜面を削平して造成されている。2号炉は外周に「コ」の字状の溝を掘削し円礫を詰めて暗渠溝状にしている。溝内の作業場は8m×5mの広さで谷側には弧状に円礫を配している。炉の下部構造は、1辺110cmの方形で厚さ約10cmの炭層が確認できた。排滓溝は北方向のみで焼土、排滓が検出された。また作業場の土中より細かく破碎した鉄鉱石が採集できた。3号炉は100cm×90cmの方形の下部構造を有し長軸の壁面には粘土が貼付されている。坑の深さは30cmで約20cmの厚さの炭層が確認できた。短軸の両辺には排滓溝を有するが炭、焼土が多く排滓はほとんどない。4号炉は「U」字状の暗渠溝を有している。炉の下部構造は120cm×180cmの長方形で深さ40cmである。長軸の辺には2～3段の円礫を積み、間隙を粘土で充填している。排滓溝は北辺にのみ確認できたが、炭層と焼土層が交互に堆積している。これらの炉の操作順序としては3号炉が2、4号炉の周溝を切り、2号炉が4号炉の排滓溝を埋めて造成されていることから4号→2号→3号の順と考えられる。また排滓場として4号炉の南斜面に大量の鉄滓、炉壁、焼土が確認され、

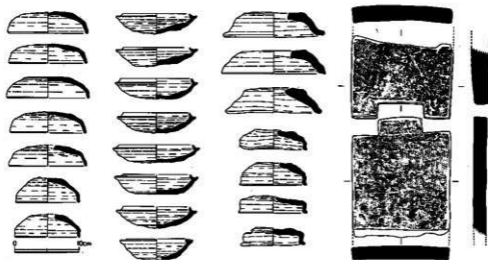
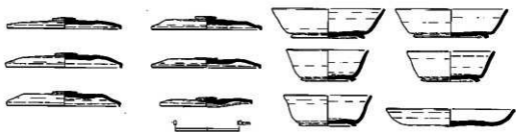


第6図 林崎遺跡谷部出土遺物(1/6)





第7図 くもんめふ1号窯出土遺物 (1/6)



第8図 くもんめふ2号窯出土遺物 (1/6)

この中から須恵器の坏、甕、壺、土師器甕、製塩土器などの破片が検出された。炉の操業時期としては先述の須恵器片や近接する千引2・8号墳よりも先行することなどから6世紀後半から末葉が考えられる。なお、遺跡は調査後埋土保存とし遺跡模写と炉のレプリカを製作した。

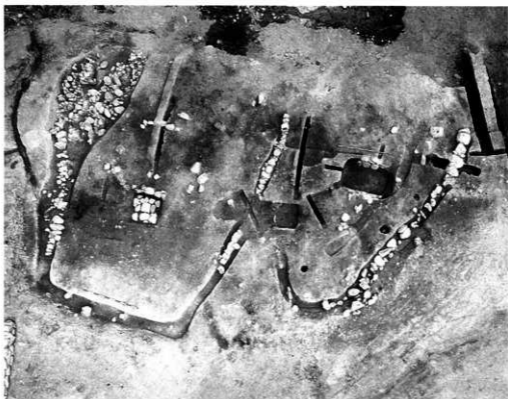
【新池奥遺跡】 遺跡は千引尾根と浅い谷を挟んで東に位置し、尾根上から弥生時代の住居跡5軒、段状遺構5カ所が検出された。また尾根上から2基、谷部の斜面から3基の横口付炭窯が検出された。全長が10m前後のもの7m前後のものがある。製鉄炉は谷部に位置し、炭窯と近接するものが多い。谷の底部の炉は、かなくろ谷と同じ規模、構造のものも多く、斜面に小さな作業場を削平したものは約50cm四方の浅い土坑という傾向がある。これら製鉄遺跡の時期としては6世紀後半と8世紀前半が考えられる。

【くもんめふ遺跡】 遺跡は用地の西端、奥板の集落に面した谷部に所在する。横口付の炭窯2基と80cm四方の製鉄炉2基が検出された。このうち炭窯は窯体に、円礫を並べ浅い溝を掘った暗渠を有している。時期としては7世紀が考えられる。須恵器窯は2基が確認できた。1号窯は、千引谷に面した南向きの急斜面に位置し残存長5mの半地下式の窯である。1回のみの操業と考えられ灰原はほとんど形成されていない。遺物はすべて窯体内のもので大型品は少ない。時期としては8世紀初頭と考えられる。2号窯は1号窯から尾根を南にこえた西向きの急斜面に位置する。全長9.5mの地下式の窯で谷部に灰原が広がる。窯の構築された時期としては7世紀前半で3回の操業が確認できたが、廃棄、埋没後、8世紀前半に窯体の半分を使い小規模な焼成を行っている。

【名越遺跡】 遺跡は用地の中央部の南に伸びる丘陵の南斜面に位置している。横口付の炭窯4基が検出された。いずれも全長10m前後で時期は出土した須恵器から7世紀が考えられる。若は尾根の頂部に位置し、千引若とほぼ同じ形態であるがいずれにも柱穴は存在しなかった。

【林崎遺跡】 遺跡は用地の南西端に派生する尾根と谷部に位置する。横口付の炭窯6基と製鉄炉3基を検出した。炭窯は7世紀前半から8世紀前半と考えられる。炉は80cm四方の浅い掘り込みである。時期は須恵器から7世紀前半と思われる。谷部では6世紀後半と考えられるカマド付の住居跡9軒を検出した。また谷部の最も深い部分から9世紀前半の包含層と、11世紀前半の焼土、炭を大量に伴う土師質土器と内面黒色土器の土器だまりを検出した。完形品を多数含んだことや白磁碗を有することなどから特別の祭祀が考えられる。また尾根上から古墳1基が確認された。長さ4mの横穴式石室で須恵器の高坏に鉄滓を入れた状態のものが検出された。時期としては7世紀後半である。

(武田)



千引かなくろ谷製鉄遺跡（左から2・3・4号炉）



千引 砦



千引2号土壘

## 平成2年度赤浜地区ほ場整備に伴う調査

遺跡名	鶴尾遺跡
所在地	総社市赤浜字鶴山後903番地外（第2図D）
調査期間	1990年12月3日～1991年2月12日
調査面積	1000㎡
調査経過	

今回の調査は、県営土地改良総合整備事業として、市内赤浜地区の平成2年度ほ場整備に伴う事前の発掘調査である。調査地は高梁川分流による総社平野のほぼ東端で、三須丘陵と接し、足守川を望む位置にあたる。標高は約7mを測る。周辺の調査では、山陽自動車道に伴って大規模な調査が足守川沿いで行われ、銅鐸が出土するなど貴重な資料が発見されている<sup>(1)</sup>。また、三須丘陵に築かれた古墳群の調査<sup>(2)</sup>、前川改修に伴う窪木業師遺跡や平成元年度赤浜地区ほ場整備に伴う城山遺跡などがある<sup>(4)</sup>。

### 検出遺構

岡山県教育委員会による確認調査結果<sup>(3)</sup>をもとに、遺跡範囲内にあたる排水路部分について調査を行った。けれども排水路の幅がわずか2mであったため、多くの柱穴や土坑、溝が検出されたものの、建物群などの想定はできなかった。しかし、弥生時代中期から後期の自然流路や古墳時代前期の推定一辺4mの竪穴住居跡、奈良時代の須恵器・土師器が多量廃棄された南北方位で流れる幅2m、深さ0.8mの溝、中世の柱穴群などが検出されており、長期的な集落であったことが想定される。



調査地全景



住居跡

## 出土遺物

確認調査結果によれば、遺跡の中心は今回行った水路部分の南側と推定されており、包含層出土の遺物が多い。なかでも弥生土器が目立つ。遺構にともなっては須恵器・土師器が溝や住居跡からまともに出てきたほか、柱穴より土師質土器片が出土した。

## まとめ

調査範囲が排水路部分のみの、わずか2m幅にすぎず、柱穴以外の遺構はその一端を検出したに過ぎない。けれども、遺物からは長期的な集落が営まれていたものと考えられ、しかも遺構の分布により時代ごとの移動があったものらしい。弥生時代には、やや東よりのトレンチにのみ遺構を残すほかは大部分が包含層によるものであり、集落は今回の調査部分の南側に広がる。古墳時代もほぼ同じで、東端のトレンチでのみ住居跡や溝が検出された。古代は、溝が1条検出されたのみで不明瞭であるが、古墳時代と同様となるか。中世は、東よりのトレンチでまったく遺構を検出できず、西よりのトレンチに偏っているほか、さらに西にいたって前川の氾濫原となる湿地帯や砂の堆積帯を検出している。

今回のほ場整備対象面積は12.5haにもおよぶけれど、発掘調査は、遺構面を掘削する排水路部分でのみ実施できたに過ぎない。そのため、明確な遺跡範囲の確認ができなかったこと、それが今後想定される農地転用にもなう再度の確認調査を必要とし、また、堤防の付け替え工事にともなって当時（明治末か？）の築堤技術を知るための調査、あるいは小字や孫字などのほ場整備とともに消滅する地名の調査など、多くの課題が残されている。（前角）

- 註1 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』21 1991  
岡山県古代古備文化財センター『所報古備』第3～10号 1987～1991  
2 本年度年報「テクノパーク総社建設に伴う発掘調査概報」  
3 岡山県古代古備文化財センター調査事業 1990.4～調査中  
4 総社市教育委員会調査事業 1989.12～1990.2 調査  
5 岡山県教育委員会『赤浜散布地』（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』77 1991）



溝検出状況

## テクノパーク総社建設に伴う発掘調査概報

遺跡名	折敷山遺跡・雲上山11号墳・折敷山古墳
所在地	総社市赤浜字折敷山南462番地外（第2図C）
調査期間	1990年10月11日～12月15日
調査面積	2120㎡
調査経過	

今回の調査は、協同組合テクノパーク総社が計画をしている工業団地の造成に伴う事前の発掘調査として実施したものである。総社平野の南東部には、三須丘陵と呼ばれる独立小山塊があり、そこには前方後円墳を含む数多くの古墳群の所在が知られている。<sup>(1)</sup> これまでの調査例としては、家形埴輪や初期須恵器、横別板鋸留短甲などが出土した木棺直葬あるいは箱式石棺をもつ法蓮古墳群、市内でも大形の横穴式石室をもち、銀象嵌裝飾付き大刀が出土した緑山古墳群<sup>(2)</sup> などがある。このような状況の中、当丘陵の北東部で約10haに及ぶ開発が計画され、小丘陵を削って谷水田を埋めることとなった。計画地内には古墳3基、集落跡1カ所の所在が確認され、そのうち古墳1基と集落跡については記録保存による発掘調査となった。

### 検出遺構

検出した遺構は、古墳1基のほか、弥生集落として竪穴住居跡や段状遺構、それに近世土壌墓1基である。

雲上山11号墳は一辺7mの方墳で、墳丘の大半は削り取られ、主体部の検出はできなかった。



調査区全景



折敷山遺跡

折敷山遺跡では、丘陵の南斜面をし字状にカットして、方形に近い壁帯溝をめぐるせた四本柱の住居跡1軒や段状遺構、土坑などがある。

それに近世墓地として長辺2m、短辺0.7m、深さ25cmを測る、土壌墓が検出された。しかも部分的ではあるが底や壁面に火を受けた痕跡を残すため、遺体を埋葬した状態のままに火葬としたものであろう。

#### 出土遺物

雲上山11号墳の周溝より、須恵器蓋坏・土師器・石製紡錘車が出土しており、須恵器はTK47併行期になろうか。

弥生集落からは、中期末とみられる小破片の土器片がわずかに出土しただけである。

土壌墓からは、三途の川の渡し舟賃であろう寛永通宝などの冥銭が出土している。ただし、出土枚数は1枚多い7枚であった。

#### まとめ

今回の調査では、弥生時代中期末の小集落跡、5世紀末の小古墳のほか、寛永銭（1636～1860年に铸造）を副葬する埋葬地が検出された。

なお、開発計画当初より緑地帯として現状保存となった、折敷山古墳については、現状での詳細測量図の作成、および保存のためのデータとして古墳墳丘端の確認を目的としたトレンチ調査を実施した。トレンチは東西南北に4本を墳丘端に限りて設定した。その結果、東側はもとより西側についても周溝が残されており、東西方向で44.5m、南北方向で42.6mの大方墳であることが確定となった。遺物は周溝底より埴輪片が数多く出土している。<sup>(4)</sup> (前角)

註1 岡山大学考古学研究所『三須丘陵遺跡分布調査報告』1976

2 総社市教育委員会『法蓮古墳群』（『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』2 1985）

総社市教育委員会『法蓮40号墳』（『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』4 1987）

3 村上幸雄「緑山17号墳」（『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 1984）

緑山古墳群調査団『緑山古墳群』1987

4 葛原克人「巨墳の造営」（『岡山県史』第2巻原始・古代I 1991）



雲上山11号墳



折敷山古墳

## 清水角遺跡発掘調査概報

遺跡名	清水角遺跡
所在地	総社市井手字清水角（第2図G）
調査期間	1990年4月16日～5月26日
調査面積	515㎡
調査経過	

今回の調査は、都市計画道路刑部一三須線の道路整備に伴う事前の発掘調査として実施したものである。調査地は、高梁川分流により形成された総社平野のほぼ中心に位置しており、標高は約11.8mを測る。昭和57年度には、すぐ南側で接続する都市計画道路総社駅前線の延長工事によって発掘調査が行われており、鎌倉時代後半期頃の土坑や溝、柱穴などが検出され、同時期の土師質土器や陶磁器などが出土している<sup>(1)</sup>。

### 検出遺構

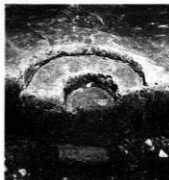
この度の調査においても、多数の柱穴をはじめとして土坑や溝群、ほかに土墳墓1基が検出された。検出された遺構群は、上・下2面におよんでおり、主に上面にて掘立柱建物と柵列の存在が想定される。

土墳墓は掘形が調査区外に延びるほか、溝に上部を削平されていたため全体を検出できなかった。その規模は長軸側で約1.1m以上、短軸側で約0.7m、深さで約20cmを測る。土層断面の観察からは木棺痕跡は認められなかったが、鉄釘が出土しており、木棺墓の可能性もある。埋葬頭位は、歯の出土位置や頭蓋骨の腐食により粘土化した埋土があったことから東枕となる。

副葬品としては、鉄刀、白磁碗、土師質小皿が出土している。



掘立柱建物



礎板を用いた柱穴

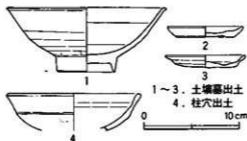


## 出土遺物

ゴミ穴と推定されるような土坑が検出されていないため、遺物の出土量はわずかであり、かつ小破片がほとんどである。土墳墓の副葬品のほかには、柱穴の礎板に転用された須恵質の平瓦や地鎮として柱穴内に入れたと思われる土師質土器などがある。

1～3は土墳墓より出土したものである。白磁碗は、口径16.6cm、器高6.8cm、高台径5.8cmを測る。端反の口縁をもち、畳付きに向かって細く延びた高台で、底が厚い。内面には内底近くに浅い段と、口縁近くに浅い沈線をめぐらし、外面の体部中ほどまでがヘラズリされる。白磁釉は高台部を除いた内外面に掛かる。土師質小皿は、口径8cm前後で口縁部のみにヨコナデを行う、非常に粗雑なものである。

4は柱穴出土の土師質土器である。



第9図 出土遺物

## まとめ

今回の調査では、土墳墓のほか、掘立柱建物や柵列の存在が想定された。建物群については、全体の規模のわかるものはなく、各建物の柱間寸法も桁行で1.4～2.2m、梁行で1.8～2.4mとばらつき、建物規模上の企画性は認められない。しかし、建物方位はいずれも揃っており、磁北N15度Wである。この方位は、現在の総社平野で認められる条理的遺構と同位である。この建物群の時期についてははっきりしないが、遺構の重複から2時期を想定している。また、この他の遺構に中世を遡るようなものがごくわずかであることから、建物群を含めた当遺跡の時期は限定できようか。おそらく土墳墓の埋葬時期前後のものと考えられ、土墳墓出土の白磁碗は11世紀後半～12世紀後半に多くみられる<sup>(2)</sup>が、伝世期間を考慮に入れて鎌倉時代前半期の埋葬にともなうものと考えている。さきの調査結果とあわせ、清水角遺跡は鎌倉時代全般にわたって集落が営まれていたものであろう。(前角)

註1 村上幸雄「清水角遺跡」(『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 1984)

2 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4 1978)

## 門田小寺土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査 及び立会調査

所在地 総社市門田454番地外

調査期間 1989年3月30日（確認調査）

1989年12月4日・1990年1月12日・3月7日（立会調査）

組合立土地区画整理事業（約7ha）が計画されたため、事前に埋蔵文化財確認調査を実施した。場所は総社市役所から北へ600mほどのところでJR吉備線に沿った北側で、都市計画道路を挟んで両側は水田である。地形をみると南東部がやや高く、北西に河道が通るものと思われた。

確認調査は、道路・水路の予定されるところにトレンチを16カ所設定し、バックホウで基盤層まで掘削した。まずT-1では安定した微高地で、表土下約1mで円礫層となる。T-2では厚さ60cmほどの遺物包含層があり、弥生時代後期～古墳時代と考えられる土器片が認められた。T-3～6では、表土下は茶灰色の砂層で遺物は僅少だが、T-6では須恵器の細片も含まれる。T-7・8では灰茶色の砂層となる。T-9の付近は寺跡といわれており、瓦や円礫が出土した。近世かと思われる。T-11は表土直下で円礫層となる。T-12は、表土下は淡茶灰色粘質土で微高地の縁辺部と考えられる。弥生後期の土器片（第11図）が出土しているが遺

構に伴うものではない。T-13～16では灰色粗砂及び砂礫層となる。T-13・15では磨滅した中世と思われる土器の細片がごく少量出土した。これらのことから、安定した微高地を想定できるのはT-1～3及びT-5の部分であり、T-10～13にかけては河道及び河道に近接するものと思われた。

確認調査の結果を考慮して、工事の施工にあたっては、遺構の予想される範囲（第11図にスクリーンで表示）について、水路

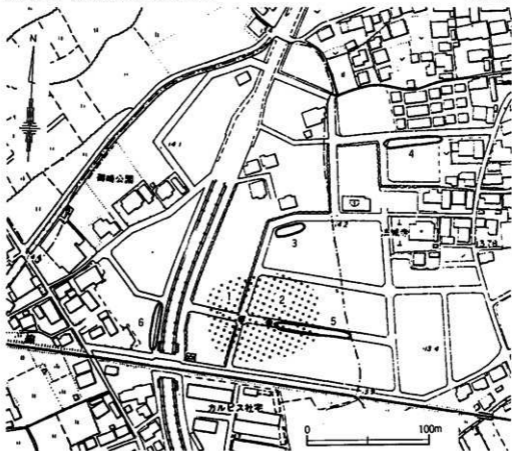


第10図 門田・小寺地区確認調査トレンチ配置図  
(S=1/5,000)

部分の掘削・下水等管渠の埋設の際に立会を行うことで対応を行った。1は下水マンホールの埋設時に立会した。表土下に厚さ50cmほどの包含層を認めたが、遺構は明確でない。2もマンホール埋設に係わるもので包含層中から弥生土器片が出土した。3・4では前記の立会時に中世と思われる土師器片を採集した。5は下水管渠埋設時に立会したが、包含層中に土器の細片を認めたにとどまる。6も下水管渠埋設時の立会であるが、既設の都市計画道路の歩道内でアスファルトの直下から隠層であった。

以上のように、この範囲では、弥生時代～古墳時代及び中世の遺跡の存在が考えられるが、遺構については明らかにできなかった。

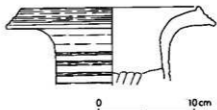
(高田)



第11図 立会調査平面図 (S = 1/3,000)

- 1, 2 下水マンホール立会
- 3, 4 中世土器散布地点
- 5, 6 下水管渠埋設に伴う立会

スクリーントーンは遺跡の予想される範囲



第12図 確認調査出土遺物 (S = 1/4)

## 新岡山空港整備事業無線施設建設に伴う 埋蔵文化財確認調査

所在地	総社市井尻野 (第2図E)
調査期間	1986年12月
調査面積	約115㎡ (トレンチ)

計画中の新岡山空港 (1988年4月開港) に関連した無線施設の建設が当該地に計画されたため、確認調査を実施した。場所は総社市街から北西約2kmのJR伯備線秋葉山トンネル南口のすぐ西に隣接し、南に向けてなだらかに下降する小高い丘陵上である。ここでは古墳などの存在は周知されていなかったが、弥生時代の集落址などが存在する可能性が考えられた。表面観察を行った限りでは、遺物は散布しておらず、頂部付近ではおそらくトンネル工事の際に削平が加えられているようであった。

トレンチは12本を設定したが、T-3・4及びT5・6は連続させたため、実際には10カ所である。トレンチの幅は1mとし、地山層 (基盤層) まで掘り下げた。

T-3・4・9では須恵器などの遺物が少量出土し、T-3・4では軽しい量の焼土塊やカー

ボンが検出された。そのほかではT-8でカーボン・焼土をわずかに含むおちこみが看取されたが遺物はなく、時期、性格は不明である。それ以外には遺構、遺物はない。

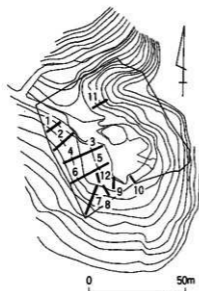
T-3・4では、トレンチの上端から5mほどのところから長さ約3mにわたって厚さ20~30cmほどの焼土及び焼土塊の堆積が認められた。この下面はゆるやかに下降し、特に熱影響で硬化したところはない。焼土の末端あたりには長さ40cmほどの偏平な石材が認められた。これは熱変化を受けておらずまたこのあたりは後世に畑となっていた際に溝を切ったためカットされているようであるから断定は困難だが、むしろ焼土遺構より後出の別の遺構であった可能性がある。この石から下は



第13図 確認調査地位位置図 (S=1/5,000)

段差をもっているが、数個の石があり、さらにカーボンを含む皿状の堆積がある。ここからは遺物は出土していない。焼土遺構の埋土中からは、6世紀中ごろの須恵器蓋坯の破片などが出土している。1は、口縁端外面にヘラ状の工具を用いた押圧による斜方向の刻み目を施している点に特徴がある。焼土遺構の性格としては、土器あるいは木炭を焼成した窯である可能性もあるが、主軸方向が等高線に直交すること、底面の熱変化が少ない点などからなお疑問が残る。2も須恵器であるが明らかに1よりも後出である。

焼土下端付近の石材に近接して、扁平な導状の破片(4)が少量出土した。色調・胎土・焼成の特徴から2~3個体と考えられる。このなかである程度法量のわかるものは、残存する長辺11.5cm、厚さ1.9cmで灰色を呈し、焼成は堅緻、須恵質である。凸面には板目状の圧痕、凹面は指頭圧痕及びびりナデが施される。また小口部はヘラ状工具で掻き取ったような痕跡がある。蔵骨器などを埋納するための施設の一部が残存したものかもしれない。なお、T-9では、須恵器高台付坯(3)が遊離して出土した。これはT-3・4の導などと年代が近似すると思われる。



第14図 トレンチ配置図 (S=1/2,000)

以上のように今回の調査範囲内では焼土遺構及び墳墓にかかわる遺構を検出し、それらはそれぞれ6世紀中ごろ、7世紀末ごろと考えられた。しかし、その後無線施設の建設場所が変更され他に移ったため、これらはすべて現状で残されたままである。

(高田)



第15図 出土遺物 (S=1/4)

## 勤労者総合福祉センター建設に伴う確認調査

遺跡名	真壁・荒神ヶ市遺跡
所在地	総社市真壁662-1, 662-8, 662-9 (第2図6)
調査期間	1989年6月26・27日, 7月10日
調査面積	約100㎡
調査概要	

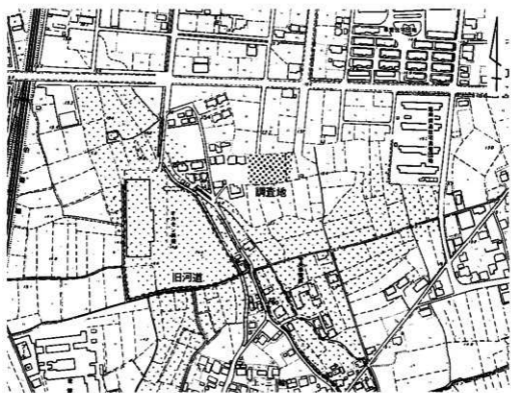
調査地は、市街地南に位置し、西と南側には周辺より一段低い旧河道が認められる。確認調査は、西側に認められた旧河道に直交する方向で5カ所トレンチを設定する予定で南東角から調査を開始した。

T-1では北側で須恵器片が出土したが全体に礫層が高く南に下がる傾向がみられた。

T-2では礫層がT-1より高い位置で認められ、やはり南に下がる傾向が認められた。

T-3では逆に礫層は北に下がる。

これらの状況から調査地中心部は礫層が広がっていることが明らかになった。



第16図 確認調査地位置図 (S=1/5,000)



トレンチ断面及び須恵器出土状況

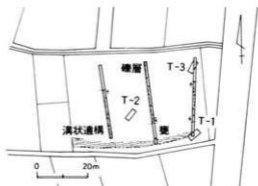
このため、遺構は希薄と考えられたが礫層の形成時期も不明であったため、重機で再びトレンチを掘ることとした。トレンチは、南北方向で3本設定した。

トレンチの状況は、最初のトレンチと同様であり礫層が広がっていることが確認され、下層に包含層・遺構の存在しないことも確認できた。

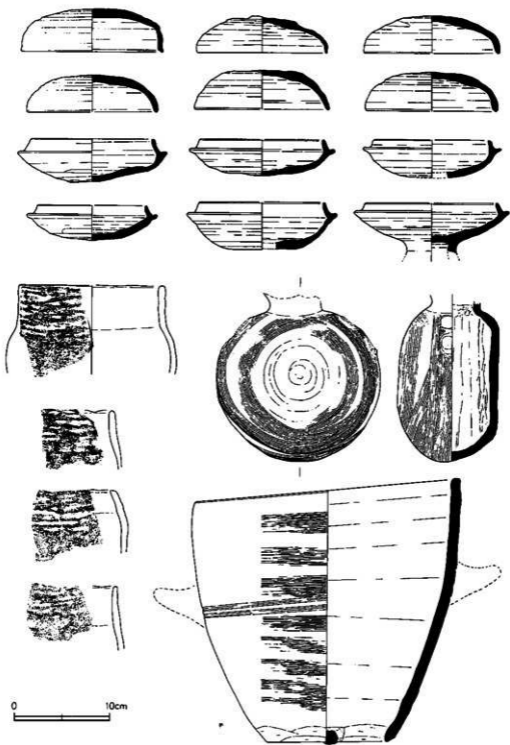
しかし、中央のトレンチ南部で須恵器の甕・甎が出土し、下層に弥生時代後期の土器が出土した。このため、南部分は重機で検出面まで下げた。後期の土器は、調査地南部分を東西方向に流れる溝状の落ち込みに含まれていることが判明した。

調査地内では、遺構は南部分の溝状の落ち込みが認められた外は、礫層が高く明確な遺構は存在しない。遺物では、弥生～古墳時代までの土器が出土しているので集落はやや離れた位置に存在するものと考えられる。

(谷山)

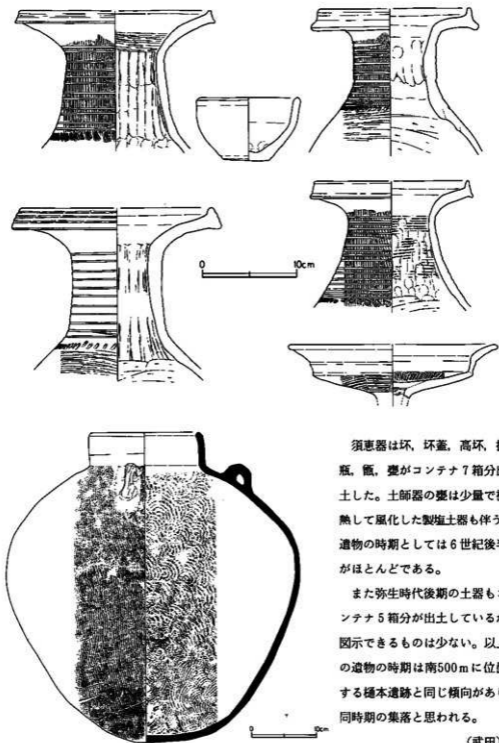


第17図 トレンチ配置図 (S=1/1,500)



第18圖 出土遺物 (S-1/4)





須恵器は坏、坏蓋、高坏、提瓶、甌、甕がコンテナ7箱分出土した。土師器の甕は少量で被焼して風化した製塩土器も伴う。遺物の時期としては6世紀後半がほとんどである。

また弥生時代後期の土器もコンテナ5箱分が出土しているが図示できるものは少ない。以上の遺物の時期は南500mに位置する榑本遺跡と同じ傾向があり同時期の集落と思われる。

(武田)

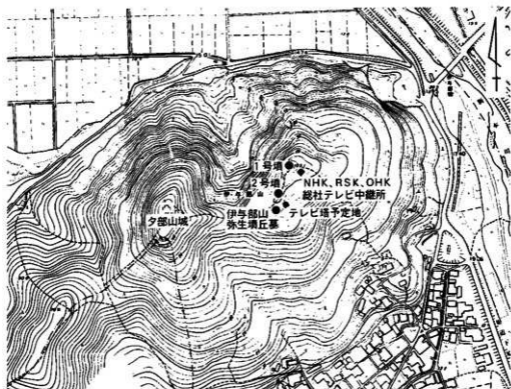
第19図 出土遺物

## 伊与部山テレビ中継塔建設地の確認調査

遺跡名	伊与部山遺跡
所在地	総社市下原（第1図F）
調査期間	1985年9月11日～9月14日
調査面積	約152㎡
調査概要	

高梁川の支流新本川の右岸には、高山・木村山などの標高200～300m級の主峰列が、屏風をたてたとく東西に連なる。この主峰列の東端の、新本川が高梁川と合する地点の近くに位置するのが標高105mの伊与部山である。高梁川流域を眼下に捉える眺望絶景の地である。

昭和60年2月末頃、この地にテレビ中継塔を建設したい旨の申し出が瀬戸内海放送網からあった。頂部東端には既設の同種施設があり、NHKなど3社による利用が行われていた。新設施設は前記3社以外の民間放送機関3社による総社市街地及び岡山市高松地区一帯の難視聴地域の解消を図ろうとするものであった。

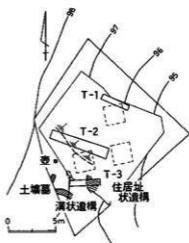


第20図 確認調査地位置図 (S = 1/5,000)

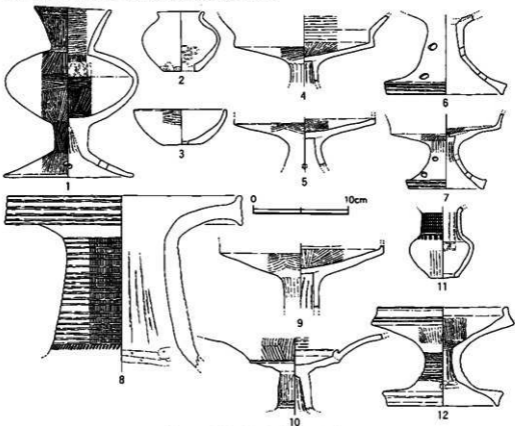
立地条件は、既存施設から 1 半径100m以内であること 2. 前面一帯は除くこと 3. 比高差10m以内位であること などであり、そのための敷地として15×15mの範囲が必要であることなどであった。

計画地の伊与部山頂部は二つの高まりがある。その一つの東側には八疊岩と称される巨大な露岩があり、頂部をやや東に降ったところに伊与部山1号墳がある。また、西側の高まりには弥生墳丘墓と10mほど東の鞍部には2号墳がある。既存の中継塔は、1号墳に近い南斜面に建設されている。

このうち墳丘墓と2号墳は、昭和41年に岡山大学考古学研究室により発掘調査されていた。詳細については『総社市史 考古資料編』を参照されたい。



第21図 遺構配置図 (S=1/400)

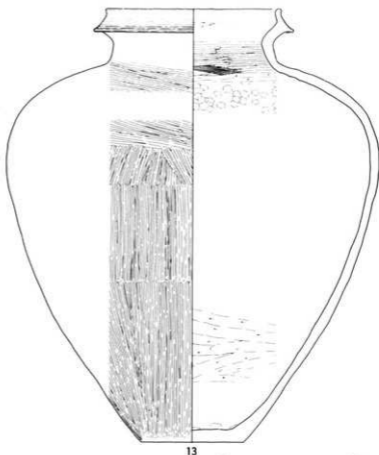


第22図 出土遺物 (1) (1/4)

こうした状況をふまえ、協議を重ねた。その結果、対象地は前出の墳丘墓と古墳2基及び尾根上には土塚墓群が推定されることから除外し、墳丘墓と古墳1基の間の南斜面に設定した。

確認調査は、予定地内にトレンチを3本設定し行った。このうち、南東部分で包含層を確認したため、発掘調査を行った。調査地北側は、谷が入り込み地山まで厚く堆積土が覆い遺物の出土も少なく遺構の存在は認められなかった。

遺構は予定地西部分で



第23図 出土遺物(2)



調査地区全景

土墳墓と壺を、南部分で住居址状の落ち込みと溝状遺構を検出した。住居址状の落ち込みは、地山上の堆積土を掘り窪めた整地面で弥生時代後期の土器・サヌカイト片が出土したが柱穴などは検出できなかった。

これらの状況から、用地内の北側は谷であり遺構の広がり西から南に広がる可能性が高いと思われる。

#### 出土遺物

全て弥生後期の土器である。1～7・13はトレンチから出土しており、8～12は表採されたものである。

1の台付直口壺は外反する口縁部を持ち、端部に弱い四条の凹線文を巡らしている。器表は脚柱部に刷毛調整が認められる外はていねいに磨きされている。2の小型壺形土器は約半分が残存している。ほぼ全面がナデによって調整されている。3の小型鉢形土器は器表がかなり荒れているが、口縁部外面に磨きが残っている。底部に焼成後になされた楕円形の穿孔がある。4～7は高坏。短脚の6・7はいずれも脚端が肥厚気味に拡張し、外面に凹線文が巡らされている。8の長頸壺は重厚な作りの土器で、頸部はやや内傾して立ち上がる。口縁部は外方に強く開き、口縁端部はわずかに内傾して上下に拡張し、外面には四条の凹線文が巡らされている。頸部は刷毛調整の上に凹線文がほどこされ、下端に刺突文が巡らされている。10は飾り高坏。全体にていねいに磨きされている。11はミニチュア土器の長頸壺である。頸部は刷毛調整の上に凹線文が巡らされ、その下に貝殻圧痕がほどこされ、胴部は磨きされている。全体に非常に丁寧な調整がほどこされている。底部には焼成後の穿孔がなされている。12は器台である。脚柱には凹線が巡らされており、受け部内面には細かい磨きがほどこされている。13は壺形土器。土器棺として使用されたと考えられ、約半分が残存している。口縁端部は内傾して上下に拡張し、外面には弱い凹線文を巡らせている。肩部はよく張り、最大径は肩部下にある。全体に器表面が荒れており調整が見えにくい。外面は胴部を全て磨き調整をしている。内面は頸部まで磨きされ、肩部に指頭圧痕が残り、底部近くには磨削りが認められる。

(谷山・高橋)

## トーザイコーポレーション女子寄宿舍新築工事に伴う調査

所在地 総社市総社中央1丁目8-2 (第2図39)

調査期間 1990年7月12・13日, 9月3～6日

調査面積 240㎡

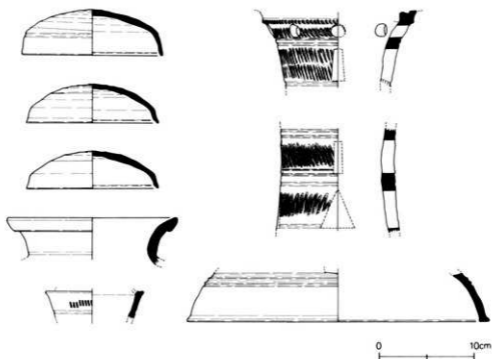
### 調査概要

本調査はトーザイコーポレーション女子寄宿舍新築工事に伴って実施したものである。本遺跡は総社市街地の南西に位置し、南東約1kmには真壁遺跡が存在する。現況は駐車場である。寄宿舍造成にあたり、建物の基礎部分を深さ約2mまでを土砂の置き換えを行うため立会調査を実施した。

旧水田面上に80～90cmの厚さで真砂土を客土している。旧水田耕作土の下はすぐ微高地であり、建物部分の東南半分に遺構の広がり存在し、住居址5軒と溝状遺構が認められた。そのうちの1軒は方形のプランを呈し、一辺の中央に竈を有していた。遺構の破壊が深さ2m下に及ばないため内部は未調査である。



第24図 立会調査位置図 (S=1/5,000)



第25図 出土遺物

#### 出土遺物

図示した遺物はすべて建物の北東角に存在する住居址の覆土から出土した。須恵器蓋坏・壺・器台、また有蓋高坏と思われる破片が認められる。図示し得なかったが土師器小片と移動式竈の小片も出土している。これらの出土遺物の時期としては6世紀後半代が考えられる。

#### おわりに

当遺跡周辺は市街化が進行しており、これまでのところ遺跡の分布状況も不明な点が多かった。今回の調査では、この地の一帯に古墳時代の遺構の存在が確認された。 (高橋)



竈付住居址検出状況 (東から)



竈近景 (北から)

## 總社市埋藏文化財調查年報 1

1991年11月 印刷  
1991年11月 発行

編集発行 總社市教育委員会  
總社市中央1丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社  
總社市總社1丁目10番24号



